八雲の精神 世界へ発信

アイルランドで初の顕彰催事

松江で所蔵 帽子や草稿公開

開幕式典 凡さん出席

松江ゆかりの文豪・小泉八雲が幼少期を過ごしたアイルランドの首都ダブリンで7日（日本時間8日）、同国初の顕彰イベントが始まった。初日は「帰郷」と題した特別展の開幕式典があり、小泉八雲記念館（松江市奥谷町）が所蔵する帽子や草稿が海外で初公開された。松江市在住のひ孫・小泉凡さん(54)が出席し、八雲の精神が広く知られ、後世に引き継がれることを願った。

（石川麻衣、一部ロンドン共同）

ダブリン・リトル・ミュージアムで開かれた小泉八雲展の開始式典。右端が小泉凡さん＝現地時間7日、ダブリン（提供写真）

イベントは、異文化を受け入れた八雲の精神（オープン・マインド）を世界に発信するのが狙い。松江市や生誕地ギリシャの実行委員会などが同国を皮切りに2009年以降、6回開いており、アイルランドでの初開催にこぎ着けた。

ダブリン・リトル・ミュージアムであった開幕式典には、渥美千尋駐アイルランド大使ら100人が出席。凡さんは「八雲の功績を知る機会になればうれしい」とあいさつした。

特別展には、同館所蔵のペンなど16点が持ち込まれ、このうち13点は初めて海外でお披露目された。八雲の生い立ちや功績を紹介するパネルも設置された。

企画を担当したサイモン・オコナー学芸員(40)は「八雲の生涯に触れるだけでなく、多彩で素晴らしい著作を読んだり聴いたりできるよう工夫した」と説明した。地元紙は、八雲が同国を離れてから約150年ぶりに「ダブリンで正式に認知される」と紹介した。展示は来年1月3日まで。

このほか同国の各地で、ともに松江市出身の俳優佐野史郎さん(60)とギタリスト山本恭司さん(59)が八雲作品の朗読パフォーマンスを行う。松江市が寄贈した八雲の胸像の贈呈式もある。

アイルランド人を父に持つ八雲は2歳までギリシャで過ごし、その後、13歳までダブリンで暮らした。1890年から松江などで生活し、日本の怪談や昔話を海外に紹介した。